

プロローグ

愛について語るときに、僕たちはどんなことを語るだろう？

思春期などとうに過ぎた三十代の僕が、人並みに恋愛もセックスもしてきて、童貞の頃の気持ちなんかすっかり忘れてしまったくせに。ワーカホリックでほぼ休みなく働いていて、たまに時間があればジャズ・バーかおかまバーに行つて酒を飲むか、ノンフィクションを読むか、デスマッチ観戦に費やすかという、ひどく色気のない生活を送っているくせに。恋占いの結果に一喜一憂する人や、パワースポットや恋愛ドラマのロケ現場に行つて恋の成就を祈るような人がいたら、思いつく限りの汚い言葉で罵つてやりたいとも思っている現実主義者のくせに。

そんな僕が、愛とは何か、そんな命題のような問いに向き合っている。

僕の本業はジャーナリストだ。日々取材や原稿執筆に明け暮れている一方、夜は新

宿ゴールデン街のバー「月に吠える」のマスターとしてカウンターに立っている。終戦後の昭和二十年代に誕生した新宿ゴールデン街には、三、四坪程度の小さな飲み屋が二百軒以上ある。かつて作家や演劇人、ミュージシャンなどが集い、夜な夜な論争を繰り広げて、独特の文化を作り上げてきたディープな一帯だ。現在は店主の世代交代に伴い、街全体がカジュアルな雰囲気に変わりつつある傾向はあるが、それでも文化の香りや刺激を求めて日々様々な人が訪れる。

二〇一二年六月にオープンした「月に吠える」は、「日本一敷居の低い文壇バー」というコンセプトだ。ライターや編集者、作家、あるいはそれらの卵たち、本好きの人が多く集まる。「太宰治の晩年の作品は……」「ビート・ジェネレーションの作家たちは……」「舞城王太郎の文体は……」など、出版や文学の話がよく交わされるが、やはり彼ら彼女らも人間である。「マスター聞いてよ、五年付き合ってた人と別れちゃったの……」「気になっていた子をお祭りに誘ったら、OKしてくれたんですよ!」「最近、彼女のメールの量が尋常じゃなくて、ちよつと重いんだよな……」など、恋愛の話題が出ることもしばしばだ。

僕はマスターとして毎日店に立ち、何百組というカップルに出会い、何百人もの恋する人々から恋愛の話を聞いた。「事實は小説より奇なり」というが、彼ら彼女らの恋愛は、ときに恋愛小説のようにドラマティックで、喜劇のように笑えて、ミステリーのように怪しげだ。同性愛カップル。不倫中の恋人たち。超・年の差カップル。ヤクザと付き合っている女。水商売の女に貢ぎ続けている男。寂しさを埋めるため、出会ったばかりの男とのセックスに溺れる女。プラトニックな愛を貫き続ける恋人たち。他にも数えきれないくらい、いろいろな愛の形を目の当たりにしたり、話を聞いたたりした。そうしているうちに、冒頭の疑問が浮かんだのだ。

愛の数だけ形があるように思える。けれど、実はみんな同じだと僕は思っている。僕ら人間が、見た目は違っても、細胞レベルでは全く同じように、愛の根底にある普遍的なピュアさに決して違いはない。なぜそう言い切れるかというと、これまで「月に吠える」で接してきたさまざまな愛に、僕が全て共感できたからだ。一見すると、とんでもなくぶつ飛んでいる愛。表面だけに目を向けると「ありえない」と思うかもしれないが、本質をじっくり観察すると「ああ、分かる」にたちまち変わる。

ひとつ例を出そう。新宿ゴールデン街に、最近まであったばかりバーの話だ。老夫婦が経営するそのバーは、ビール一杯で五千円〜一万円を請求されたという。ひどいケースだと、泥酔させられてATMまで連れて行かれ、三百万円近いお金を盗られた人がいるという噂も聞く。そのため、お店ではしょっちゅうトラブルが起き、客と老夫婦の怒鳴り声が近所に響き渡り、警察が駆けつけてくることは日常茶飯事。見かねた組合長が注意をしても、まるで聞く耳を持たなかった。二人のことをアメリカの大悪党になぞらえて、「新宿ゴールデン街のボニー&クライド」と呼んだ人もいたほどだ。

ところが時代が流れ、健全な街づくりが進められる中で、現代のボニー&クライドは、生きることにも苦労していたようだった。悪い評判が広まったため、客が来なくなり、経営状況は悪化していった。そして冬のある日、妻がお店の中でひっそりと死亡した。死因は急性の心臓病による病死だったという。その後、お店の扉は閉ざされままとなった。一週間後、扉が閉まったままのお店から異臭がしたため、近隣のお店の人たちが消防車を呼んで開けたところ、後を追うように夫も店の中で死亡していた。警察の発

表によると、事件性はなく、死因は病死ということだった。いずれにせよ、悲しい最期だった。

同時に、幾つかの事実が明らかになった。夫婦だと思われていた二人は、実は夫婦ではなかったのだ。一度は夫婦になったものの、何かが原因で別れ、それでも完全に別の生活をすることはできず、二人でぼったくりバーを続けていた。夫がひどい酒飲みで、妻によく暴力を奮い、妻が泣いていたという証言もある。

二人が互いのことをどう思っていたのか、僕には分からない。何が二人を繋ぎとめていたのだろうか。ただ、妻の死という現実によって、様々な感情が浄化されたとき、残ったのが愛だったのではないだろうか？喪失によって悲しみが訪れ、初めて、もしくは改めて愛に気づいた。僕にはそう思えてならないのだ。

これから紹介する六つの物語は、僕が新宿ゴールデン街で出会った方や、彼ら彼女らが紹介してくれた方、あるいはインターネット上で知り合った方など、様々な方から取材を行って書き上げた。協力いただいた方々に、心から御礼を申し上げたい。そして、これから本書を読まれる読者の皆さんへ。六つの物語は、一見すると滑稽に映る

かもしれない。けれどその根底に触れた瞬間、「愛とは何か？」のヒントをきつと感じていただけるだろう。少なくとも、僕はそうだった。

前置きはこのくらいにして、さあ、愛について語ろうか。

コエヌマカズユキ